

大江町への交通アクセス



【制作・発行】大江町教育委員会【左沢文化的景観絵図原町編作画】志村直愛
〒990-1163山形県西村山郡大江町大字本郷丁373-1 TEL:0237-62-3666
大江町ホームページ: <http://www.town.oeyamagata.jp/>
※絵図で示した建物は、絵図範囲内に所在する重要な文化的景観の重要な構成要素です。また、記載した建物の建築年代は、所有者等からの聞き取りによります。



表紙・裏表紙はヤマト葛地商店が所蔵する大正～昭和前期頃の原町通りが撮られた写真を加工したものの

本郷・七軒地区との結びつき 支えあった町場と農山村



↑大江町立歴史民俗資料館(旧斎藤半助家を移築)

左沢の繁栄は、大江町の本郷・七軒地区に広がる農山村集落との互惠関係のうえに成り立っていました。農山村で生産された青芋や薪炭などの農・林産物は左沢の町場で取引され、最上川舟運の港町であった左沢の繁栄に欠かせない物でした。文化13年(1816)、左沢河岸から積み下した村山郡の特産物として豆135俵とともに青芋196駄(1駄は馬1頭に背負わせられる荷物)が記録されています。農山村の特産物であった青芋は、最上川舟運と日本海を通る西廻り航路を経て、奈良町や小千谷縮の原料として上方や北陸に出荷されました。大江町立歴史民俗資料館は、七軒地区の十郎畑で青芋などを扱った問屋(旧斎藤半助家)を移築したものです。寛文・享保ころから活躍し、左沢の内町に2軒の分家が表加賀屋・裏加賀屋として店を出して、各地に青芋を送りました。また、青芋を扱った左沢の商人たちが舟運の安全を願って奉納した手水鉢が巨海院に伝わっており、そこに込められた祈りとともに、商人たちの財力や結束力を今の私たちに感じさせます。



↑楯山公園から眺めた最上川と現在の左沢の町並み

最上川舟運とくらし 広い世界とつながった左沢



↑左沢の東端を流れる最上川(最上橋から)

左沢の河岸は、江戸時代、上流で使われた小鵜飼船と左沢より下流で使われた船の荷物を積み替える場所として重要な役割を果たしました。今の旧最上橋のたもと付近には「米沢舟屋敷」があって、その東側にあたる「川端」から月布川合流点付近に船が着いたと伝わります。最上川舟運は、全国とつながる流通・往來を左沢にもたらしました。当地に伝わる「百目木甚句」の歌詞には、「松前のにしん こんぶ」「京の友禅博多帯」など北前船が北海道や上方へ向かった時の商品がうたわれています。また、江戸時代、最上川舟運によってもたらされた富を背景として左沢の町衆が参加した天満神社の祭礼は、囃子屋台やシシ踊りが町を練り歩く盛大なものでした。この囃子屋台などは、一時途切れながらも各地区で継承されており、普段は左沢駅前の交流ステーションに展示され、大江の秋まつりでお囃子とともに町中を回って町衆が造りだした芸能文化の景観を今に伝えます。



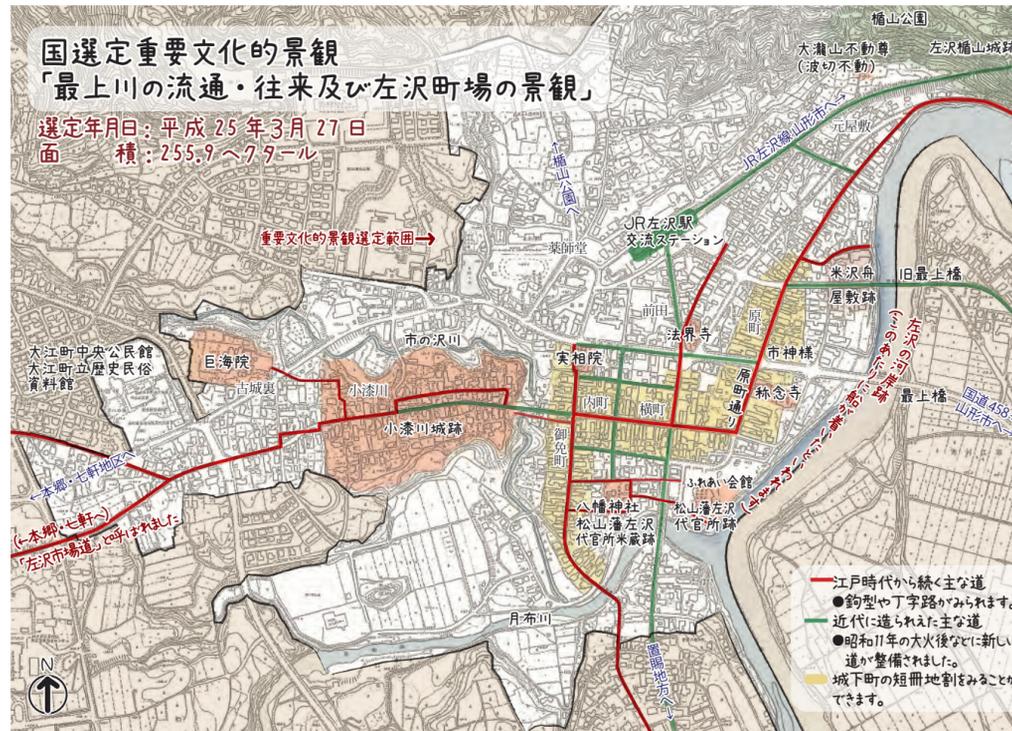
↑秋まつりで町を練り歩く囃子屋台(原町通り)

未来へ贈る、最上川と暮らしの営みの風景 重要文化的景観 最上川の流通・往來及び左沢町場の景観

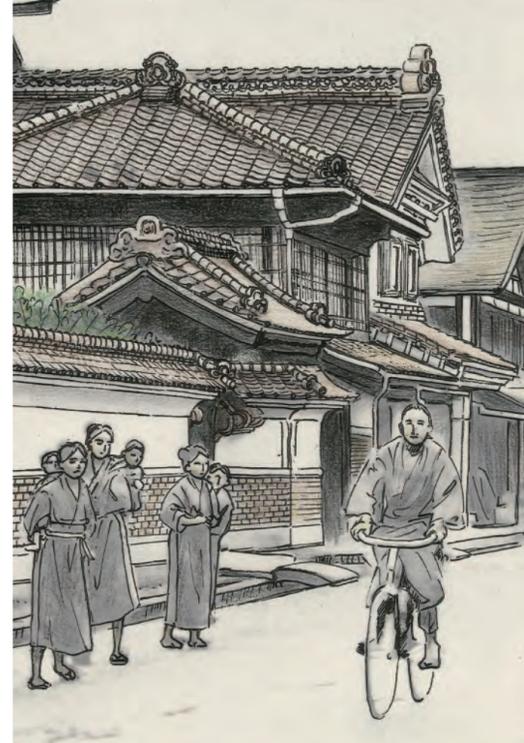


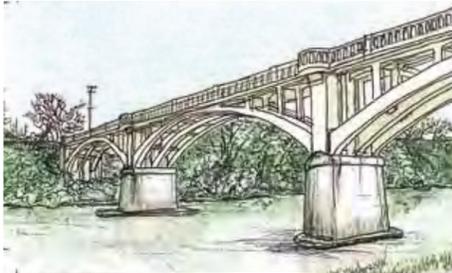
↑小鵜飼船絵巻(明治時代・巨海院) ↑現代の初市(楯町) ↑市神様(原町) ↑大江の秋まつり(内町・楯町)

「最上川の流通・往來及び左沢町場の景観」は、左沢の暮らしに根差した文化的景観です。左沢は、五百川峡谷を流れ下った最上川が村山盆地に流れ出る場所にあたります。交通の要衝であった左沢の楯山には、中世、最上川を見下ろすように大規模な山城が築かれました。江戸時代に入ると小漆川に城が移り、今の町並みの骨格となる城下町が整備されます。また、「米沢舟屋敷」が置かれるなど最上川沿いに河岸が展開し、最上川舟運の恩恵を受けながら町の賑わいが創出されました。今の左沢の景観は、各時代の姿を継承しつつ、時代に合わせた変化を経て形成されました。山城跡に所在する楯山公園からは、楯山の麓で大きく曲がる最上川や段丘上に広がる左沢の町並み、さらに遠く西方に朝日連峰が連なる様子を望むことができます。町場では、江戸時代からの通り沿いに並び建つ土蔵や商店建築、社寺に納められた奉納物、秋まつりや初市といった行事などが、かつて舟運とともに営まれた町のくらしを伝えています。この絵図は、左沢の原町周辺を描いたものです。原町通りは江戸時代の初めころ小漆川城下町として造られたとされ、最上川の河岸や舟屋敷と小漆川城や代官所を結ぶ道でした。通り沿いには元造り酒屋の店蔵などが並び建ち、舟運時代の繁栄を今に伝えています。絵図と一緒に原町を散策して、歴史が薫る風景を探してみたいかがでしょうか。



国選定重要文化的景観 最上川の流通・往來及び左沢町場の景観 原町 編絵図 山形県 大江町





1 旧最上橋 昭和16年(1941)竣工 鉄筋コンクリート造

最上川に架かる三連アーチ橋。現最上橋が架かるまで、左沢駅前と山形、寒河江を結ぶ幹線道路を渡していました。川面に映る曲線美に加え、親柱や欄干の装飾など、近代土木遺産としての評価も高い最上川のシンボリックな存在です。



2 光明院 木造平屋建て

寛文8年(1688)開山と伝えられる寺院。原町通りから西へ延びる参道の奥に、宝形屋根を載せる大師堂が配されています。組物や内部の須弥壇は伝統的な形式を伝え、特徴ある外形が周辺一帯のランドマークの役割を果たしています。



3 金子家 蔵:天保5年(1834)築、土蔵造 主屋:門:明治37年(1906)築、木造平屋建て

木屋金子家は宝暦以前に平塩から移り住み、藩の御用達も勤めた商家。奥の土蔵は周辺では最古期の天保期の建築です。明治末竣工の主屋には洋風意匠も見られ、見越しの松や門も残されており、原町通りの商家の伝統形式を伝えます。



4 法界寺 本堂:江戸期築、木造平屋建て 山門:昭和7年(1932)築、木造平屋建て

慶安元年に開かれた浄土宗の寺院で、近世城下町の北端に位置します。緑に囲まれた境内は、駅前通りと国道458号線の交差点に面しており、入母屋の大屋根を載せた江戸期と伝わる本堂と昭和初期の山門がアイストップとなっています。



5 ヤマト菊地商店 主屋:木造二階建て 土蔵:土蔵造り

明治30年頃、下北山の山ト菊地家から原町通りの西側に分家し、酒田の本家支店と米や塩を取引してきた商家です。間口の大きい切妻の大屋根と阿弥陀籤のように梁を重ねた妻飾りが店舗の特徴で荷蔵や主屋の北には庭を持ちます。



6 清野家 店蔵:江戸期築 新蔵:明治期築 主屋:明治期築、木造二階建て

会津屋清野家は原町通り沿いの商家の中で最大級の規模と質を誇ります。近世には造り酒屋を営み、華道と茶道の家元でもありました。通り沿いに建ち赤瓦を葺いた店と洋風意匠を見せる店蔵、築地堀の他、庭を挟み座敷蔵を持ちます。



7 菊地家 明治26年(1893)築 土蔵造

昔から青芋の取引業を営んだ商家。青芋を仕入れて京都へ運び、京都から生糸を買い付けていました。原町通りに面して建つ蔵は、妻面を通りに向けた店蔵で、1階は格子戸が設えられています。短冊状の地割を伝える大火以前の貴重な建物です。



8 片桐家 明治36年(1903)築 木造二階建て

原町通りに面して建つ明治期竣工の主屋は、近代には料亭「錦屋」として使用されていたものです。短冊状の地割の中で、入母屋の妻面を通りに向けた店構えの形式を保っており、舟運時代の商家の賑わいを今に伝えています。



9 五十嵐家 明治41年(1908)築 木造二階建て

明治末に竣工した木造の商家で、元々は炭を販売していました。かつては原町通りに面した1階部分が店で、2階はセットバックしています。南側には奥まで路地が通じ、堀沿いに小庭が設けられて、植栽と一体的な景観を作り出しています。



10 菊地糶屋 店:昭和11年(1936)築 木造二階建て

現当主で11代目を数える西村山郡内でも特に古い糶屋。原町通りに面した店と工場は大火後の竣工です。その間に建つ座敷蔵と最奥の味噌蔵はさらに古い時代の竣工で、工場から店舗まで糶屋の一連の建物群がまとめて残った貴重なものです。



11 上田家 店舗:昭和13年(1938)築、木造二階建て 蔵:昭和11年以前築、土蔵造

元々を屋を営んでいた商家で、現当主で16代目を数えます。店は大火後の昭和13年に竣工したもので、天井も高く、二階には高欄を持つ華やかな印象の造りが特徴。敷地の最奥部に建つ土蔵は、大火以前からあった古いものです。



12 安彦こうじ店 昭和11年(1936)築 木造二階建て

19世紀始めから糶屋を営む老舗で現当主が7代目。戦後から硝子屋も経営されています。内町・横町通りに面し、角地を隅切りした店舗は大火後の昭和11年竣工。北端から店舗、住宅、工場と短冊状の敷地を活かした建物の配置が特徴です。

